

食王(シヨッキング)、今年も大盛況!!

文・古野公喜(ジャーナリスト)

大盛況に終わった。業務用酒類食品卸業・株式会社「名畑」の年1回の大会「食王2023」が4月18日に大阪国際会議場で開かれた。193のブースが並び、招待した飲食店経営者・スタッフら2660人が集結。名畑社長は「目標の3000人には届かなかったけど、手応えはあります。内容には満足してます」と目を細めた。



インパクト抜群の会場入り口

2660人が来場、セミナーも好評

新たに10社がブースを出店。ビール、日本酒、洋酒、焼酎、泡盛やワインなど酒類だけでなく、調味料、おつまみ、麺類に加え、洗剤など外食業界で使用するものが勢揃いした。特に今年は別フロアを借りてワイン特設会場を設置。42のワインブースには、ところ狭しとワインボトルが並んだ。また名畑が選んだ純米酒100種類の試飲会も。さらに販売代理店契約を結んだサイエンス



記者会見で語る名畑社長

Profile

名畑 豊 なたば・ゆたか

1962年12月20日、大阪府豊中市出身の60歳。豊中高、大阪大経済学部を経て1985年にサントリーに入社。1990年秋から家業に戻り専務。2007年に代表取締役社長に就任。趣味はゴルフ、音楽鑑賞。家族は妻、2女と孫3人。

社の「ミラブルプロダイナー」で食器などの油汚れを洗浄する実地体験会も開催した。スマートフォンによる飲食店向けオーダーサービス「よろこんで」の開発も発表された。新型コロナ禍対策として人材不足の解消、接触回避する対応のためのサービス。「中小規模の店舗で、自社システム開発は難しい。安価で利用できます」と名畑社長。続けて「お客様と店員がコミュニケーションを取る時間ができて、外食の楽しさをさらに提供できる。外食産業の魅力を上げることができたらい」と余剰効果をアピールした。セミナースペースでは飲食店がSNSを活用するための授業も開かれた。日本一やさしいSNSの授業と

して「飲食店必見!! 成果の出るインスタ活用術」「動画戦国時代」「未来を拓く! 北海道ワイン」を開催。さらに繁盛店応援・情熱セミナーとして「サービス(接客)基礎講習/サービスって何?」「おススメの勧め/単価アップ! 売りたいものを売る力」「食物アレルギーの基礎知識と対応を学ぶ」など、他で見られない外食産業界における「勉強会」が開かれた。単なる「展示会」でなく「提案会」。名畑社長の「外食産業を盛り上げた」の切なる思いが詰まったイベントだ。広く設けられたスペースでの商談も。来年で20回目の節目を迎えるが「20回目とかは考えない。来年またよりよい形に進化させたい。成長です」と前向き。今後は各出店プー

スのチェックや、営業社員から飲食店関係者への周知徹底を目論む。

コスプレ好き? 形態模写で笑いを誘う

イベント数日後、名畑社長は「皆さん、楽しんでくれたと思います。お客様の笑顔を見られて、喜びを感じた」と振り返った。当日のスタート前、社員全員を集めて氣勢をあげた。MLBエンゼルスやレッドソックスの真つ赤なキャップ、Tシャツを身につけ、さながら大谷翔平風のコスプレ。WB C侍ジャパンの世界一を例に挙げてチームワークの大切さを説き「一致

団結して食王(シヨッキング)を盛り上げましょう」と拳を突き上げた。人を喜ばせること、楽しませることが好きな名畑社長が、旬の人気者「大谷翔平」を選んで食王に臨んだ。実は内外で「コスプレ好き」で知られている。年始のあいさつでは、全社員を前にその年の干支や時事ネタのコスプレで登場するのが名物となっている。大阪・中津の社屋二階ペランダにコスプレ姿で登場し、社員だけでなく集まった業界関係者に手を振るのが正月の恒例行事。「毎回、社員から『こんなの、どうでしょうか?』などと助言が来ます。でも、絶対にその通りにはしない。人が思いつくことをやりたくない」と名畑社長は独自で考えて「出し物」を決めているそうだ。

今年1月1日、真つ白なバスローブに大きな耳をつけた干支の兎のコスプレ姿であいさつ動画をSNSにアップした。クビに真つ赤なタオルを巻いた独自ブランド「アントニオ・うさぎ・なばりん」だった。1月4日の恒例あいさつでは可愛いウサギの出で立ちで登場した。過去に話題をさらったコスプレは数え上げたらキリがない。他社の催し物で、おもてなしで相手を驚かせることも。警察官、相撲の行司などはまだまともな姿? 日産CEOを務めたカルロス・ゴーンが、19年12月に音響機材搬送用の箱に隠れて国外逃亡する際に変装した作業着姿で笑いを誘

2660人が詰めかけた会場の模様



右:食王開催直前に大谷翔平のコスプレで氣勢をあげる名畑社長
左:カルロス・ゴーンのコスプレで驚かせた名畑社長

い、20年正月はアニメ『鬼滅の刃』の主人公・炭治郎の顔を干支の牛(丑)に塗り替えたコスプレを披露。幼少の頃から人を驚かせ、楽しませることに無上の喜びを感じていた。小学生の頃はクラスの「お楽しみ会」で寸劇やコントの台本を書き、自ら演じた。「皆の嬉しそうな顔が浮かびます」と名畑社長。高校時代にはピンポン球を半分に割って大きな目玉を作り、両腕を奇妙な格好で動かしてバルタン星人風の「なばたん星人」としてクラスを盛り上げた。

自身、一番ウケたと言うのが高校2年時の信州への修学旅行での思い出。クラスの出し物として同級生470人の前で形態模写を披露。当時、毎日放送「ヤングおー!おー!」で若かりし頃の明石家さんまが演じていた阪神・小林繁投手のアンダーズローをアレンジした逆回転再生の形態模写。「さんまさんがやってた?

オレの方が先だったんじゃないかな。会場がどよめいた。すぐく気持ちよかったですね」と名畑社長は振り返った。大阪大学経済学部に進んでからもお笑い好きは変わらず。当時の朝日放送の恋愛バラエティー番組「プロポーズ大作戦」の人気コーナー「ファイリングカップル5対5」に友人らと5人で出演。そこでも笑いの渦を巻き起こし、後日、同局の番組にも出演した。また、情報雑誌「L'Espresso」から「忘年会での一発芸」について取材された。その時は「名古屋の東山動物園のダチョウのモノマネ」を伝授した。

人を喜ばせたいというサービス精神は持って生まれたモノ、学生時代に培ったモノだろう。「お笑いの道? それは考えなかったけど、マスコミ業界には行きかけた。興味がありましたね。仲のいい友人がテレビ局に就職した。お笑い業界への就職はなかった」。

最終的には、酒類・製造販売会社「サントリー」への就職を決めた。



食王の入口ゲートにて名畑社長と筆者